聖書の物語と私たち ⑰
イスラエル王国時代その4
ソロモン王

司祭パウロ鈴木伸明

偉大な王ダビデも年老い、後継者を選ばねばならないときがやってきました（列王記上1章）。神様は預言者ナタンを通してソロモンに油を注ぎ、3代目の王としたのでした。

ダビデはソロモンを戒め、この世の働きを終えて亡くなります（列王記上2章1節から11節）。

ソロモン王はダビデ王と同じく40年国を治めました（列王記上11章42節）。

ソロモン王が即位した頃、ギブオンでのことです。神様はソロモンに何でも願うものを与えようと言われました。それに対しソロモンは、自分の長寿や富、敵の命を求めるのではなく、民を正しく裁き、善と悪を判断する心を求めました。

神様はそれを聞いてお喜びになり、知恵に満ちた賢明な心に加えて富と栄光をソロモンに与え、「わたしの掟と戒めを守って、わたしの道を歩むなら、あなたに長寿をも恵もう」と約束されたのです。

神様の約束通り、ソロモンにはすぐれた知恵が与えられました。列王記上3章16節から28節には、ソロモンの知恵を実感させられる物語が記されております。ある日、二人の女性がソロモン王のところへやってきました。二人はほぼ同時に子どもを産みましたが、一人の女性は子どもに寄りかかって寝たため子供が死んでしまいました。ところがこの女性は自分の子どもともう一人の女性の子どもを取り替えてしまったのです。二人の女性はそれぞれ、生きているのが自分の子だと言い争いながらソロモン王のところへやってきました。

王は言った。「『生きているのがわたしの子で、死んだのはあなたの子だ』と一人が言えば、もう一人は、『いいえ、死んだのはあなたの子で、生きているのがわたしの子だ』と言う。」そして王は、「剣を持って来るように」と命じた。王の前に剣が持って来られると、王は命じた。「生きている子を二つに裂き、一人に半分を、もう一人に他の半分を与えよ。」生きている子の母親は、その子を哀れに思うあまり、「王様、お願いです。この子を生かしたままこの人にあげてください。この子を絶対に殺さないでください。」と言った。しかし、もう一人の女は、「この子をわたしのものにも、この人のものにもしないで、裂いて分けてください。」と言った。王はそれに答えて宣言した。「この子を生かしたまま、さきの女に与えよ。この子を殺してならない。その女がこの子の母である。」

中塚 画

王の下した裁きを聞いて、イスラエルの人々は皆、王を畏れ敬うようになった。神の知恵が王のうちにあって、正しい裁きを行うのを見たからである。（列王記上3章23節～28節）

ソロモンは父ダビデが始めていた神殿建造を引き継ぎ、完成させました。列王記上5章から6章にはその神殿が大規模かつ豪華で、7年かけての建築であったことが記されています。続いて王の宮殿の建築（13年）、神殿の備品、エルサレムの城壁等多くの建築を手掛けました。また外国とのつながりを強めて国の富を増やし、イスラエルは世界の有力な国の一つに数えられるようになっています。

しかしソロモンは積極的な外交政策ともに、政策結婚を盛んにしました。「彼には妻たち、すなわち7百人の王妃と3百人の側室がいた」（列王記上11章3節）と記されている通りです。こうした王の政策的国際結婚は異教の宗教をもたらすことになり、ソロモン自身も晩年には異教の神を礼拝してしまいました。

また建築の度に、ソロモンは自分の属するユダ以外の各部族の人々を強制的に駆り出しました。ソロモンの栄華は、実はイスラエル民の犠牲と苦しみの上に成り立っていたのです。

ソロモンは栄華を極めましたが、過ちも多い王でした。一番大きなのは、イスラエルを守り育ててきた「神様への信仰」を大切にしなかったことだったのです。ソロモンは確かに立派な神殿を建築しました。しかしそこに宿るべき一番大切な「神様への信仰」を伴っていませんでした。せっかくの壮麗な神殿も権力を誇示するだけの存在でしかなかったのは何とも皮肉なことです。ソロモンの生涯から私たちは虚栄心や権力の恐ろしさ、神様への信仰を伴わない行いのむなしさを学ばされます。

（川越キリスト教会牧師）